文学の杜

仙台文学館友の会会報

第51号
平成28年7月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

新年度文学館友の会総会

会則改正・役員人事案など承認

会員増をめざそうとの意見も

春らしい陽ざしの感じられる4月24日、平成28年度の仙台文学館友の会総会が、仙台文学館を会場に開催された**＝写真＝**。

事務局伊藤美菜子さんの司会で始まり、会長のあいさつ**（別途掲載）**。会長を議長として議事の進行に移る。平成27年度の事業報告、収支決算報告、監査報告が了承された後、会則改定について事務局からの提案があった。内容は、第10条の役員に関する条項。これまでの「会長1名、副会長2名、幹事2名、監事2名」を、「会長1名、副会長2名以内、幹事若干名、監事2名」としたいという案が示され、了承された。引き続いて平成28年度の事業予定案および予算案が了承された。

次に役員の改選。副会長（前原正治・阿部友康）、幹事（宇津志勇三）、監事（佐野のぶ）の退任にともなうもの。事務局からこれに代わる人事案が提案され、了承された。新役員とサポーターは以下のとおり。

▽会長　渡辺祥子▽副会長　寺嶋信▽幹事　一文字ひろみ、尾形光子▽監事　近田裕子、長沼和子▽サポーター　大久保ひろみ、坂田久子、佐藤満子、佐野のぶ、千葉滋子、雪下康子

以上の議事が終了したところで、出席者全員の自己紹介に移る。持ち時間内に自由なおしゃべりをということになる。以下その内容を抜粋。・会員を増やす方法を考えたい。会員にとってお得感の感じられる事業など。・会員の交流が欲しい。・行事の案内が入るのはとても良い。・短歌講座、読書会がたのしみ。・会費は半年単位ではどうか。などなど。出席者は19名。

総会終了後、文学館庄司学芸員による特別展「まど・みちおのうちゅう」の解説を聴いた。（佐）

自由な文学の楽しみ

渡辺会長あいさつ

最近、若者の自動車の志向に、スポーツカーへの回帰が見られ、それにともない、二極化が進んでいると聞きました。運転を車に任せる自動運転派と、逆に、自らがハンドルを握り、車のポテンシャル（可能性）を最大限に引き出すマニュアル運転派という事です。車に運転を任せる乗り方も、自らが全てを取り仕切るかのような運転も、それぞれの楽しみや味わいがあると思うのですが、文学の世界にも同じことが言えるのではないかと思いました。

例えば、文学の大きな世界に身をゆだねて酔う喜び、振り回されるような楽しみがある一方で、勝手な想像をめぐらしたり、自分の意志で振りまわす楽しみや喜びがあるのではないでしょうか。友の会の活動は、そのほんの入り口かもしれませんが、見学会や文学散歩で、その文学世界にとっぷりと浸り、読書会で自由に意見を述べ合うなど、文学の世界の自動運転と、マニュアル運転の双方を楽しむ事が出来る場になっているのでは…。

そういう意味でも、会員の皆様には、浸るも良し、色々提案をしてくださるも良し、と、自由に関わっていただきたいと思いますし、会の運営も、会報を読んで下さるだけの方にとっても有意義であり、行事に参加いただいても得るものがある、そんな幅のある自由度のあるものでありたいと願っています。

新年度も、文学を通しての楽しい交流を続けて参りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

文友一滴

節分から八十八夜が過ぎるころ新聞の記事やテレビの番組で「お茶」が目に入ってくる。店頭にも新茶の幟がはためく。加えて『殿、利息でござる！』には茶畑が映っているではないか。

そんな折、新聞の「ひととき」欄に電子レンジでお茶を作った体験記をみつけた。私にもできそうと思い、切り抜いておいた。

仙北にある生家には茶畑があり、自家製お茶を飲んでいた。トタン張りの箱の中で手揉みしていた光景が目に浮かぶ。あの箱を「ベーロ」と言っていたような気がするが…。テレビを見ていたら「焙炉（ほいろ）」につながった。外来語らしき方言も漢字をあてたらよく分かった。

いつの間にか人手もなくなり茶畑をやめてしまったが、6本ほど庭に移しかえてあった。そのお茶の木が数十年過ぎても年中青々と元気よくいきづいているのだ。初冬にはかわいい白い花をつける。切花用に貰ってくることはあった。

早速実家に出向き新芽三葉のところを80グラムほど摘んで帰宅。レンジを使うことで、充分に乾燥してよりのかかったお茶が出来上がった。2回分くらいはある。とっておきの急須をだして丁寧に入れた。香りとすっきり感とで味は上々。

ターシャの言葉の日めくりには「価値のある良いことはみんな、時間も手間もかかるものです」と。でもこんな世の中だもの、製茶機で作られた煎茶や深蒸茶をいただくのが日常。量が多い場合や、昔そのものの燃料のことを考えたらとてもとても家庭でなんかできそうにない。少ない量と、電子レンジの力を借りた上で、たま～に、ちょっと手をかけて（手揉みするだけなんだけど）ニンマリする位がちょうどいい。（一）

私と郷土と文学 ⑨

幼いころ、青森出身の亡き父親が語ってくれた怖い話がある。

「辺りがなぁ、真っ暗になると、死んだ兵隊だちが（八甲田）山の方がら、足音鳴らすて行進しながら降りて来るんだね……」

この話は、新田次郎が昭和46年に発表した「八甲田山死の彷徨」巻末の取材ノートにも収められている。また、黒澤明の映画「夢」の中の第4話「トンネル」に、この話を連想させるシーンが出てきたことを覚えている。

明治35年（1902年）1月、厳寒の八甲田山で対ロシア戦を想定した歩兵連隊による雪中耐寒行軍訓練が行われた。しかし、これが山岳遭難史上類を見ない遭難事件を招くことになる。「八甲田山死の彷徨」は、この惨事を克明に描いている。

未曾有の悪天候に見舞われた八甲田山、猛威を振るう自然と、歩兵連隊との闘いは阿鼻叫喚と化し、凍えた歩兵が次々に倒れてゆく……、文章の力強さに読み手は圧倒され、寒気の恐怖がひしと伝わってくる。原作は後に映画化されており、「天はわれわれを見放した！」の惹句とともに、八甲田山の悲劇は広く世に知れわたるようになった。

振り返れば若いころ、新田次郎の山岳小説に夢中になり、山行を駆り立てられたものだが、どうしてか八甲田山には未だに行っていない。行ってはいないが、本、映画、そして父親の語りのせいだろうか、八甲田山は私の中に既視感のように刷り込まれている。（其田敏美）

父親が語ってくれた八甲田山

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✽「はい、じゃんこ」子供を座らせるときに使っていました。これが方言だと知ったのは最近のことです。友人の婿殿は江戸っ子で、友人とその娘の「じゃんこ」を聞いて、頭の中が？マークになったそうです。もちろん「じゃんこ」は動作付きだったので、は～んと理解したとのこと。子育て用語にも方言はあるのですね。何か他にもあるのでしょうか。（K）

―「文友の部屋」の原稿募集―

150字以内で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

カフェ「ひざしの杜」オープン

センスの良い椅子や、シックな木のテーブルが配置された店内から外に目をやれば、木々の緑をバックにしたテラス席。4月27日、文学館内にカフェレストランがオープンした。ひざしの降りそそぐこの場所をにぎわいの場にしたいと、若いスタッフが張り切っている。

営業時間は10時から16時まで。

メニューは週替わりのランチがパンとご飯の2種類、カレー、ラーメン、うどんなども。ティータイムには、選べる3種類の日本茶に和菓子が付く。このお茶がカクテルを思わせる素敵なグラスで出されるのはうれしい驚きだ。

文学館の特別展にちなんだ創作メニューにも取り組んでいる。（佐）

宇津志勇三さん死去

役員・読書会・会報編集で活躍

今年3月まで文学館友の会幹事を長年務めた宇津志勇三さんが、6月7日病気で亡くなった。74歳だった。友の会役員以外に、会報の編集委員、読書会の中心的活動など多方面に活躍中で急逝が惜しまれる。約一年前から病気を抱えていたが、4月下旬に入院するまで持ち前の果敢な行動力を発揮していた。

サポーターから幹事として新役員入りしたのは平成22年。役員会や会報編集会議では、新しい企画を提案するなどアイデアマンであり、常に積極的な活動家だった。井上ひさし、佐伯一麦の両氏に師事しながら文章修行を怠らず、小説を書くのを日課としていた。

福島県南相馬市の出身で、最近は東京電力の原発事故による実家の被曝を作品化していた。亡くなる直前には現代ものの作品集「水の音」を出版したばかり。歴史小説の「北に吹く風」「寒き夏」に続く3冊目の出版だった。合掌。（友）

友の会のサポーター募集

友の会ではサポーター活動を導入して会の活性化を図っています。現在6人が参加しています。文学散歩など諸事業での世話役や、会報の発送作業などを行っています。自主的な友の会の運営をスムーズに行い、親睦を深めるために欠かせない存在となっています。応募は随時。事務局に申し出てください。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第51号をお届けします。

▽ことばの祭典の裏方を手伝った。初めてなので緊張しながら。短歌、俳句、川柳の合同吟行会の様子をみたり、合同講評などを聞くことができた。事前申込なし、参加料なし。お手伝いだって面白い。是非ご参加を！（一）

▽「ことばの祭典」の受付をして、ことばが生まれる場に立ち会わせてもらった。世代を超えた参加者の熱心さに、ことばの温もりを感じた。文学館スタッフの仕事場をのぞくことができたのも興味深いことだった。（近）

▽梅雨のただ中、たった一日の晴れが嬉しい。風が湿気を吹き飛ばしてくれる。窓を全開にしよう。そんなことを想像する今日、本棚の前に立つ。湿気を含んだ本の匂いもいいものだと思う。さて、何を読もうかな。それとも街の本屋に散歩に行こうか。強面のあの作家が、微笑んでくれるかもしれない。（和）

▽宇津志勇三さんを亡くしたのは痛恨事だ。友の会にも大損失。初対面は十年ほど前の俳句会。共に文学、歴史好きで、親交の仲となった。4月と5月の2回入院先にお邪魔した時は元気だったので、計報にはショックを受けた。（友）

▽イタリアのルドヴィコ・エイナウディのピアノ演奏をCDで聴き続けている。静かな旋律の繰り返しが、どうしてこんなに心地良いのだろう。わずかに曲調が変化するところで、いつも少しだけ背すじが伸びる。（佐）

友の会随想

戦後のラジオ番組「東北うたの本」について

友の会会員　海鋒　博美

先日、仙台駅前を歩いていると、旧丸光百貨店の屋上から、「この道」のメロディーが聞こえてきました。

戦後七十年が過ぎ、当時のことが次々と甦って来ました。時間帯によって「荒城の月」や「家路」が流れ、駅やバス停に向かう時など時計の役目を果たしていました。

仙台は、大正時代の「赤い鳥運動」に共鳴する文化人が多くいて、終戦と同時に、天江富弥、スズキヘキ、富田博、刈田仁、小名木滋（永野為武）、濱田広介、結城ふじお、春日こうじなど「おてんとさんの会」が中心になって、子供たちの心を癒やし、励まし、復興の担い手となってもらおうと新しい童謡を作りました。世に出る出版物、放送などはG・H・Qの検閲を受けるため、東北地方の昔からのお祭り、子供たちの行事、鳥や虫のさえずり、小川の流れ、道端に芽吹く様子など、四季折々の情景が詠まれました。

作曲は福井文彦、佐藤長介、父の海鋒義美ほか東北や東京の作曲家が担当しました。

終戦翌年の二月から仙台中央放送局（NHK）のラジオを通して児童合唱団の歌声がオーケストラの伴奏で放送されました。毎週夕暮になると楽しみにしていた子供たちがボロボロのトランジスタラジオに集まり耳を傾けていた姿が懐かしく思い出されます。

今年三月、「東北うたの本を歌う会」のコンサートが開かれました。十八年間にわたり放送された全五十五曲を十三ステージ、七百人を超す合唱団がステージに立ち「春のあしおと」「おくれ雁」「仲よしの歌」「みんな元気な私たち」など、昔を思い出しながら歌いました。また被災地、気仙沼市、石巻市でも交歓音楽会を開き聴衆に感動を与えました。全五十五曲を復刊、楽譜を印刷し、宮城県内全小・中・高校、並びに近県の学校に贈呈しました。戦後生まれた東北の文化遺産を若い人々に歌い継いでいただきたいと心から願っております。

第25回読書会　青来　有一「虫」

被爆を生きる女の葛藤

青々としたウマオイが血だらけのふくらはぎをゆっくりと這ってきます。葉っぱのように垂れた足の皮を、ウマオイは四角い口でもしゃもしゃと喰い始め、「まだ、生きておるね？」と尋ねるのです。…こんな書き出しで物語は始まる。

被爆から60年が過ぎた今も、光子の中によみがえってくるのは、ある男とのたった一度の過ちである。信仰もあり家庭もある男の行為はなんだったのか。それを喜びとして受け入れた自分はなんだったのか。神とはなにか。信仰とはなにか。被爆者とはなにか。男もすでに亡き今、光子は彼の妻に宛て「あなたの知らないあの人は、実はウマオイだったのですよ」と告白の手紙を書く。

・原爆の悲惨さを思い自分の生き方を考えさせられた。・男はダブルスタンダードだ。・虫も人も神の前ではみな平等ということか。・神に見捨てられ、理性のない虫になった人間のことか。・神の否定は、それだけ被爆体験の酷さを表している。などの感想が出された。結局光子は手紙を出さなかったのだろう、出さないで欲しいと願うことで、重いこの作品にひとつの灯りを求めたのだった。

4月13日、11名の出席。（佐）

第26回読書会　太宰　治「桜桃」

親子・夫婦関係の苦悩

6月8日、第26回読書会には太宰治の短篇小説「桜桃」を取り上げた。折しも6月19日は太宰の誕生日と、自殺の遺体発見日とが重なる桜桃忌だった。行き詰まった最晩年の私小説として、また構成や文章など作品として―二つの読み方という視点から話が進められた。

全員（9人）が作品の冒頭と最後に出てくる「子供より親が大事」というフレーズに注目、さまざまな解釈を述べた。

「『子供が大事』と言うのが世間一般だろうが、それは外向きであって太宰は内向きに苦しい親の本音を言ったのでは」、「太宰は若いときから奉仕の道化を演じたが、この作品でも父親は冗談を言って家族を笑わせようとし、奉仕に疲れたのでは」、「子供や妻を大事にしたくても出来ない生き方しか出来ず、酒に逃げ込んでいる」、「夫婦喧嘩の小説だと作品中に書いているが、争わずに無言の対立であり、ここでも酒に逃げている」、「太宰の私生活を離れて東京のある家庭を描いた作品として読めば、短いがよく描かれている」、「家庭小説としては不満であり、男と女の違いを書いたのだろうと思う。男はちょっと嫌な人間だが」…。

太宰の作品はどれも暗いが、桜桃を食べる最後のシーンには感動したという意見や、太宰の作品に改めて出合えたのが良かったという感想もあった。（友）

◇　◇

次回の読書会は10月12日午後1時30分から。作品はヘミングウェイ『老人と海』（新潮文庫）。3時からは文学館レストランへ移動してお茶飲み会。会員であれば参加は自由。申し込みは事務局へ。

施設見学会

雨と民話と赤おにと

「夕鶴の里」と「浜田広介記念館」

7月6日、雨の中、バスは21名を乗せて定時に発車した。往路は恒例の自己紹介、今回は初参加の方が多かった。

最初の目的地は山形県南陽市漆山「夕鶴の里」だ。そこは大正時代に建築された蘭蔵を改装した「資料館」と、隣り合った「語り部の館」で構成されている。

まず資料を見学して、語り部の話をうかがった。置賜地方の方言で語られた夕鶴伝説と民話は、語り口の優しさと手の動きの美しさがとても印象に残るものだった。

次に鶴布山珍蔵寺縁起をもとにした人形浄瑠璃風の映像を見た。この縁起物語は江戸時代に著された『鶴城地名選』に記されていて、書き残された鶴の恩返し伝説の中では日本最古のものだそうだ。

この地区の方々は、残された民話を大切にして、伝えていこうとしている。もう少し見学したいと思いながら、高畠民俗資料館へと移動した。

夕鶴の里の雰囲気がある、建物自体が資料のような古民家で、手打ち十割蕎麦の昼食をいただいた。到着したときにやんでいた雨が、食事中にまた降り出した。それもかなり強い降りだった。さあ大変、多くがバスに傘を置いてきた。2、3本の傘で数往復、相合い傘のピストン輸送だ。こんなことも梅雨の時期の見学会らしい思い出になった。

「ひろすけホール」での記念撮影

浜田広介記念館、大きな赤おにが出迎えてくれた。樋口館長の解説は、資料そのものも充実していたが、いくら時間があっても語り尽くせないという気持ちが伝わるものだった。「ここはバブル期に建てられたので」と、館長さんは少し恥ずかしそうに紹介してくださった。子供も楽しめる設備も整っている。もちろん私たちも、時間ギリギリまで楽しんだ。広介の生家を見学し、「ひろすけホール」で、駆けつけてくださった宮原博道さんの篠笛の演奏を聞き、カッコウの声に送られて帰路についた。（和）

第19回ことばの祭典

吟行題は「山」または「小」

仙台文学館主催の、第19回「ことばの祭典―短歌・俳句・川柳へのいざない―」が6月19日開かれた。応募作品数は、短歌部門76点、俳句部門79点、川柳部門82点が寄せられた。吟行会の課題は「小」（しょう・こ・ちいさい）または「山」（やま・さん）。

賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作、参加者が選ぶあじさい賞。小池光館長賞。

《ことばの祭典賞》

◇短歌の部

怒りもて脱ぎ捨てし靴結局は探しあぐねて夜の砂山　草野志津久

◇俳句の部

万緑の山に抱かれ胚になる　明石嘉夫

◇川柳の部

魂を丸ごと洗う山清水　仁多見千絵

《小池光館長賞》

◇短歌の部

眼閉じ魚屋の店思い出す小さいわたしがすわっているよ　紺野みつえ

◇俳句の部

盲たる父見ていたり山の風　林静江

◇川柳の部

玄関に仁王立ちする山の神　渡辺進

特選、秀逸、佳作、あじさい賞の受賞者は次の人たち。

〔短歌の部〕▽**梶原さい子選**（特選）石垣弘子（秀逸）中村春、紺野みつえ（佳作）畠山みな子、工藤吉生、中島静江、鈴木悟、小形愛美▽**佐藤通雅選**（特選）岡田とみ子（秀逸）三浦真弓、小形ゆき（佳作）畠山みな子、後藤ゆかり、佐藤隆貴、原田千代子、浅川芳子▽（あじさい賞）三浦真弓

〔俳句の部〕▽**照井翠選**（特選）真田義子（秀逸）山崎光子、黒河内玉枝（佳作）渡邊とり、佐藤毬、八島敏、林静江、関光良▽**高野ムツオ選**（特選）中村春（秀逸）深谷実、小田島渚（佳作）真田義子、小林宏基、関光良、佐藤涼子、黒河内玉枝▽（あじさい賞）林静江

〔川柳の部〕▽**大石一粋選**（特選）真田義子（秀逸）深谷実、木村恵子（佳作）佐藤岩嬉、工藤吉生、荒川祥一郎、八島敏、中島静江▽**雫石隆子選**（特選）畠山昭二（秀逸）渡邊とり、渡辺不二夫（佳作）佐藤久嘉、菅野實、佐藤隆貴、林静江、佐々原洋子▽（あじさい賞）小形ゆき

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして、ことばの祭典に参加しました。受付での短冊配布、あじさい賞用の作品貼り出し、みなさまから投票いただいた用紙を回収しての開票作業など、一日、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。